

シンポジウム 『「甘える」とはなんだろうか?』まとめ



本シンポジウムは、幸せなお産と甘え子育てとの関連性についての意見交換だった。

大会長の北島先生はよく知った助産師が継続して出産前後、出産時に介助、支援をしてくれる助産所出産で、幸せなお産ができる。

その後も助産師の介助、支援で幸せな甘え子育てが出来るようになると主張された。産科医である笠松先生も最近問題になっている親子関係の歪みは、母子関係が始まる周産期に、産科医、小児科医が、母子関係作りに真剣に取り組まれていないことであると気付かれ、生後1か月迄の母子関係が、甘え子育ての原点になり、思春期、青年期の行動の原点になると教えて下さった。私達はもっともっと綿密に、親子を観察し、言葉にならない母子の心の響き合いを探る必要があると、深く反省させられた。

助産師の大底みどり先生は沖縄県八重山諸島で、多職種の人達と連携しながら地域に根差した妊娠期から子育て

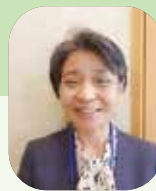
座長 澤田 敬 小児科医

て期まで切れ目のない支援を続け、保健師の役目もおられ、地域全体の母子を大底先生が甘えて包み込み、まるでマリア様のように見えた。同じく助産師の毛利多恵子先生は早期の医療介入の多い出産をした人の訴えとして多いのは出産によるトラウマであり、赤ちゃんを拒否する人もいた。その一方で、配慮あるケアを受け、幸せなお産、自然分娩をした母親たちは、赤ちゃんを、喜びをもって受け入れる人が多かったと報告された。しかし辛いお産であっても、妊娠期からの継続的ケアを受けると、赤ちゃんを前向きに受け入れできるようになり、「妊娠中ずっと信頼できる誰かが傍にいるケア」「家族立ち合い出産」「出産中の自由と自由な動き」が重要だと言われた。助産師は優しい母親の役目をしていると思った。

シンポジストの3人の先生方が強調されておられることは、優しい母親のように、母子を安心感、温かさ、信頼感で包み込んでゆくことの大切さではないかと思われた。

シリーズ コロナ禍を振り返って

元津軽保健生活協同組合健生病院産婦人科医
(現岩手県立二戸病院産婦人科) 阿部 美貴



2020年4月、弘前大学病院、国立弘前病院(現弘前総合医療センター)、当院の市内分娩取り扱い3病院の産婦人科責任者が教授室に集まり、「コロナ陽性妊婦は大学で診る」とこと「周産期センターである大学病院と国立弘前の里帰り受け入れは停止する」ことを決めました。当院のみで全ての里帰りに対応するのは困難なので開業医の先生方にも協力して頂くということで、教授名と弘前市医師会産婦人科部会長名で呼びかけを行いました。

家族で新しい家族を迎えることを大切にしていた当院としては断腸の思いでしたが、病棟内に入院患者さん以外を入れない、外来でのソーシャルディスタンスの確保、里帰りの方は妊婦健診を受けた直後に帰省し2週間の自宅待機・紹介状は家族が病院に届けカルテ作成し電話で妊婦健診の予約、などの対応をしています。当院では産褥指

導時に、リハビリからの授乳姿勢指導や薬剤師からのお話しもしていますが、やめる方向ではなく、どうしたらやれるかという立場で、広い場所にしたり、個別にしたりしました。分娩室ではスマホを接続したままにしたり、入院患者さんへのタブレット配布を行なったりしましたが、映像が繋がっただけでも、と思う反面、やはり“ぬくもり”、五感の中でも触れることって大切だという思いが募ったのも事実です。

このような事があると地域連携は強化されます。それを、本部機能、情報収集と状況判断、事前の連絡や周知・協定、訓練、日常からのコミュニケーションなど、まさに災害対策と同様に日頃からの備えにすることが必要です。その時に個々が大切にされる事も一緒に考えたいですね。

日本乳幼児精神保健学会 事務局

〒231-0063 神奈川県横浜市中区花咲町 1-4 ベルメゾン桜木 412(ゆりかご訪問看護ステーション内)
一般社団法人 日本乳幼児精神保健学会事務局
TEL 045-341-0025 FAX 045-341-0365 E-mail jimukyoku@jaimh.org 世界乳幼児精神保健学会 日本支部



会費のお振込みは下記の口座をお願いします

みずほ銀行(金融機関コード:0001) 新横浜支店(店番号:356)
普通預金 3055110 一般社団法人日本乳幼児精神保健学会

お詫びと訂正:先日発行しました学会誌 Vol.18 の裏表紙 Contents に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
誤: Takashi Ogasawara 正: Takafumi Ogasahara



Japan Association for Infant Mental Health

日本乳幼児精神保健学会

NEWS LETTER

発行者 日本乳幼児精神保健学会 理事長 渡邊久子

11号

2026年2月27日

第5回 学術集会を終えて

大会長 北島 博之

元大阪母子医療センター研究所・自然分娩推進協議会 新生児科医



大阪で初めて第5回学術集会を、学会員の皆様、そして全国各地から集まっていたいただいた助産師や様々な職種の方々と共に実りある

会として終えられましたこと、心より感謝申し上げます。今回は、前回の浜松大会に続き、妊娠、出産から始まる親子へのよりよい「親子の出会いからはじまる甘えに満ちた子育てを目指して」と大きな目標を掲げましたが、「甘え」に満ちた子育てが、子どもの心を健やかに育てるためにいかに大切かということを再確認できた学会でした。

「いのちの教育」を実践されている助産師さん・お母さん方との討論では、子ども達だけでなく、その親の心を揺り動かす有様も報告していただきましたので、今後も周産期から継続して関わってゆく親子支援のあり方を、これからも継続・普及・拡大・強化していかなければならないと感じました。一方、親子が「甘え」に満ちた子

育てを行えるための背景となる、母子への不安のないリラックスした環境・状態をお産周辺において作るための支援方法に関しては、その重要性を認識することを更に深く議論すべき時期に来ていることも見えてきました。

今回の講演の中で、京都大学の明和政子先生が自我を身体化してゆきながら育ててゆくには体全身を使った遊びの大切さを強調されていました。次回の富山大会では「子どもの遊び」が親子への寄り添い・支援の対象と考えられます。ウィニコット博士の育児講義(猪股丈二訳) 子どもと家族と周りの世界「赤ちゃんはなぜなくの・子どもはなぜあそぶの」に書かれている本から教えられた、母乳育児の時さえ必要な遊びの大切さ、更に離乳後には体全体を使って遊ぶことの大切さを、「甘え」の子育て支援の一環として、是非、次回の学会で学会員の皆様と一緒に勉強してゆくことができますよう心の底から願っております。

日本乳幼児精神保健学会 第6回 全国学術集会のお知らせ

大会テーマ いのちを躍動させる遊びの“ちから”～こども心で遊びあおう～

会期 2026年
11月22日(日)、23日(月)

会場 富山大学五福キャンパス・教養共通棟

大会長 早川隆志

「あそび」はヒトが生きることや成長することや暮らすことにとって無くてはならない行動なのではないでしょうか。富山大会では「遊ぶこと」の本質を、育児の原点である「三項関係」や「間主観性」、「甘え」という本学会のテーマと関連させ、聞きたいと思います。また、能登半島地震から2年、災害時における子どもの遊びの大切さについても、現地の支援事例から皆さんと共に考えてみたいと思います。

「子育てに必要な脳とこころを育む」を聴いて

子ども家庭庁の有識者委員であり、生涯にわたる脳とこころを育む保育実践への提言者でもある明和政子先生の教育講演をお聴きしながら、私の内臓感覚は激しく揺さぶられ、大阪大会会場にいる幸せをかみしめていた。

研究者としてチンパンジーの子育てを経験され、その後親になられた実体験を背景にして、他の動物とは違うヒトの子育ての特徴について話された。ヒトの脳の発達に重要なのは、乳幼児期の、くっつきあい。他者との「密・接触」を、基本とする社会的環境だ。そういえば幼い頃「おしくらまんじゅう」など、相手と密着して力加減の妙を楽しんでいた場面が浮かび上がってくる。また幸福を感じながら生きていくためには、いざという時に、「共制



御できる誰か」の存在が必要だと、圧倒的な説得力で述べられた。先生の研究室では、学生の頑張り

こころの相談室とやま(臨床心理士) 伊東 真理子

を全身で認めると、学生は涙するそうだ。乳幼児期に十分に満たされてこなかったかもしれない“触れ合い”への渴望が想像されて、私も泣きそうになった。

次に、ヒトは「共同養育」の形質を獲得して進化してきた生物であり、母親のみに負担が集中する子育ては、不自然だと話された。「妊娠期からの男性の親性脳の発達」の研究結果を詳述されながら、親性脳の発達には生物学的な性差はほとんど見られない。養育経験を通して可塑的に変化すると話された。当会の最新号の「家族の風景」(p 73~75)には、父親の子育ての日常が濃やかに描かれていて感動したが、日々の赤ちゃんとの接触が蓄積されているからこそ、著者の親性脳も育っているのだと、今回の智見とがピタッと繋がり、響き合ってきた。

最後に、腸内細菌叢と脳の関係についても触れられたので紹介の記事(朝日新聞2024,3,26)を閲覧した。これからも、ヒトの身体・心・社会のつながりを、科学者として解明し提案して下さるのであろう。同郷の先生の御活躍が、とても楽しみである。

子どもたちと育む いのちの学習

医師として地域の子どもたちと向き合う中で、自分を大切にできない子どもが多いことに気がついた。医療の現場だけでは限界があり、教育の中で「いのちの大切さ」を伝える必要性を強く感じるようになった。

保育所での内科健診で、子どもから「先生はそれ(聴診器)で何を聞いているの?」と尋ねられた。この言葉が私の背中を押し、自分の体を知ることから自分のいのちを大切にできる学びをつくりたいと考えるようになった。

2002年、FOUR WINDS学術集会で、カナダ・トロントでRoot of Empathy(共感の根)を展開しているMary Gordonに出会った。2004年にはトロントでその学習を見学させてもらい、私の「いのちの学習」の構想は大きく広がった。

そして2006年、医師、幼稚園教諭、保育士、保護者、地域のボランティアを中心に、いのちの学習「カンガルーのポッケ」を立ち上げた。

認定NPO法人カンガルーの会
理事長 澤田 由紀子



子どもたちは、いのちの話をするとき驚くほど真剣に耳を傾ける。自分の体の不思議さに目を輝かせ、友だちの気持ちを想像しようとする。いのちを学ぶことは、科学の学びであると同時に、他者を思いやる心を育てる学びでもある。

私たちが行っているのは「教育」ではなく「学習」であり、主体はあくまで子どもである。

四万十の自然の中で育つ子どもたちは、季節の移ろいや生き物の営みを通して、いのちの循環を肌で感じている。その感性に寄り添いながら、私は今日も子どもたちと一緒に「いのちってなんだろう」を考えている。教えているようで、実は私自身が彼らから学んでいるのだと、いつも気づかされる。

「阪神淡路大震災から30年」 私のトラウマケアと 乳幼児支援の軌跡



この度、第5回日本乳幼児精神保健学会の教育講演でお話しする機会をいただき、阪神淡路大震災から30年の記録や写真を振り返る貴重な時間をいただけたことを深く感謝いたします。

1995年1月17日未明に起きた震災で、長田区から須磨区にかけて燃え続ける炎とゴムの焼ける匂いは、今も鮮明に記憶に残っています。仮設住宅で生活する被災者は大きな不安を抱えていました。日本で初めてできた兵庫県こころのケアセンターに勤めたことで、えひめ丸事故や東日本大震災、熊本地震などに関わらせていただき、認知行動療法やEMDR、長時間暴露法、SEなど様々な学びの機会を得ました。仮設住宅へ行き「こころのケアセンターです」と訪ねても、辛い人ほど支援を拒む、「支援が必要です」と語れる人は少ないことを知りました。そこで

多機能型児童発達支援施設「きっずTREE」
大上 律子

仮設住宅のイベント参加を通じて周りの人との関係づくりから始めると、その後のアウトリーチがスムーズになることを学びました。この経験から得た教訓は、①直接的な支援の申し出は受け入れられにくいこと、②関係性が支援への橋渡しとなること、③寄り添う姿勢が最も効果的、ということでした。これが今日の私のカウンセリングの基盤となっています。

また、支援者自身のこころのケアの重要性にも気づかされました。多くの仲間の支えにより歩んできた経験が、2007年の認定NPO法人西神戸トラウマカウンセリングルームの設立につながりました。

あっという間の30年でした。しかしそこで学んだことや人との交流が今の私を形作っていると思うと、感慨深いものがあります。これからも、カウンセリング技術の習得に自己研鑽を続けてまいります。

「赤ちゃんとのふれあい体験」 から見えたもの

先日、ある学校の先生から「20年程前に親子として参加し、その子がパパになりました。」と、伺い、私たちが、「ふわっと」として関わった20年という時間が育んだ「いのち」の繋がりを改めて実感しました。

そして、今回の学術集会では、今まで、漠然としていたものが、「たしかなもの」になりました。赤ちゃんともふれ



ふれあいサポートネット「ふわっと」
代表 神原 真理

あった時、幸せホルモンが分泌されるというお話を伺い、生徒たちのあのなんとも言えない笑顔の理由に合点がいったのです。「赤ちゃんは魔法使い」というのも納得です。今年、生徒のふれあい体験前のアンケートで「大人になったら、赤ちゃんを育ててみたいか?」という問いに「とても思う」と答えた生徒は38%「あまり思わない」「まったく思わない」は24%でした。何もしなければ彼らはそのまま大人になるのです。また「ふれあい体験は中学生に必要か?」は、体験後は97%が必要だと答えています。やはり、赤ちゃんから幸せな時間をもらっているのですね。

今回、こどもたちの「いのち」が健やかに幸せに成長することを研究し応援してくださっている皆さんのお話を伺い、とても心強く感じ、私もその一端を担う者として、できる事を続けていきたいと思います。本当に貴重な体験をさせていただき感謝します。ありがとうございました。